

## ドイツ, バイエルン州基幹学校の教授プラン (音楽)

川西 孝依 (岡山大学教育学研究科)      奥 忍 (岡山大学教育学部)

本稿は, ドイツ, バイエルン州基幹学校の教授プランの中から「教科に関連する教授課題と教育課題」と「学年別教科カリキュラム」の「音楽」の部分日本語に訳出したものである。社会のグローバル化に伴って世界各国の音楽教育の動向について盛んに研究が行われている。中でもドイツは日本の音楽教育研究者にとって強い関心の対象である。しかしながら, 州ごとに異なる「教授プラン」が実施されているために全土を鳥瞰することはできていない。そこで, 本稿では全体像の把握に近づくべく, これまで研究されていないバイエルン州を扱う。オルフの教育メソッドが生まれ実践されたこの州における音楽教育の現状を把握することは日本の音楽教育研究にとって重要なことと考え, 「基幹学校 (Hauptschule)」の教授プランを訳出する。この教授プランは, 以下のような点で日本の学校音楽教育のあり方に大きな示唆を与えるものである。

- ・ 学校生活からドロップアウトするかもしれない生徒に対する指導が配慮されている。
- ・ 各教科のカリキュラムを設定する前提として, 各学年の生徒の特性や授業の重点に関する明確な記述が見られるため, 教科の枠を越えた総合的な学習が可能である。
- ・ 活動先行型で, 様々な音楽活動が具体的に述べられており, しかも各音楽活動が音楽的諸要素などの学習と密接に関連づけられている。
- ・ 伝統的な音楽やポピュラー音楽が実在する音楽の一種として, 他の音楽ジャンルと並列的に組み込まれている。

キーワード: バイエルン州, 教授プラン, 基幹学校

ドイツ・バイエルン州基幹学校教授プラン 目次 (2004)	
I. 基礎と方針	1. 継続する学校としての基幹学校 2. 基幹学校の使命 3. 基幹学校における教育 4. 基幹学校における授業 5. 学校生活, 学校での成長, 学校の特色 6. 教授プランに沿った学習
II. 教科課題と教科をまたがる教授に関連する教育課題	
II.1 教科をまたがる教授課題と教育課題	1. 社会の基礎問題と時事的・政治的成長のための解明 2. 個人の生活形成への支援 3. 労働生活と経済生活の準備
II.2 教科に関連する教授課題と教育課題	カトリックの宗教学, プロテスタントの宗教学, 倫理, ドイツ語, 数学, 英語, 物理/化学/生物, 歴史/公民/地理, 体育, 音楽, 美術, 労働・経済・技術, 仕事・織物づくり, 職業の技術領域, コミュニケーション, 技 術の領域, 家政の社会領域, 情報科学, 簿記, 速記
III.1 基幹学校 5 学年から 9 学年のための教科カリキュラム	5 学年, 6 学年, 7 学年, 8 学年, 9 学年, 9 学年 (通常クラス) の基礎知識 と主要専門知識
III.2 基幹学校 7 学年から 10 学年の卒業資格コースのための教科カリキュラム	M7 学年, M8 学年, M9 学年, M10 学年, 10 学年 (卒業資格コース) の基 礎知識と主要専門知識
補遺	時間配当, 使用略語と記号, 生徒としての義務

## Ⅱ.2 教科に関連する授業課題と教育課題

### 音楽 — 教科の特色

#### 重なり合う目標と課題

音楽は人間文化の基本的な要素であり、若い人々の生活に高い価値をもたらす。音楽理解や音楽体験は一般教養教育や人格の発展に貢献する。

この教科への要請は、次のようにして音楽に対する興味を深めることである。即ち、生徒は多様な音楽表現方法やその現象形態との個人的関係を発展させることを、自己理解や世界理解の一部として経験し、創造的な活動へと促されるようにする。音楽との集中的な取り組みは喜びをもたらす、協同的、社会的なふるまい方を支援し、生徒の表現能力を高め、彼らをさまざまな感覚的認知へと促すものである。生徒は芸術や美の現象に対する判断能力において支援を受けなければならない。教科の特性は、音楽活動や音楽を聴くことが、学校生活に好ましい影響を及ぼすことのできる緊張緩和の効果を成すという点にある。緊張と緊張緩和の交代の中で、生徒は音楽の多様な効果の可能性を知るのである。

#### 内容と目標紹介

音楽の授業の重点は、音楽との行動的な交わりにある。そのためには、いっしょに歌うことが必要である。どの学年においても、歌は暗記で学ぶことになる。歌の選択に関しては、公に許可された教材作品を参照するよう指示される。さらなる重点は、手本に倣って演奏したりすること、音楽の素材を用いて独自の作品を作ること、音楽を聴いたり音楽から絵や動き、劇に置き換えたりすることである。生徒はこれらすべての音楽の交わり方によって、またメディア利用との関連の中で、自分の経験や好みを獲得し、また必要な知識を得る。そのような生徒を念頭においた授業は、音楽に近づく様々な機会を開き、生徒に固有の才能をもたらすを広げることが可能にする。そのための条件は、音楽の授業の様々な領域が絶えず相互に関連づけられているということである。

授業の対象は、あらゆる時代のあらゆる形式の音楽であることが可能である。民族的起源の異なる生徒たちの共同生活は、多くの基幹学校にとって重要である。異なる文化の音楽との取り組みにおいて、見知らぬ人に対する興味や理解を引き起こす可能性が見いだされる。

### カリキュラムの構造

教科のカリキュラムでは、どの学年のためにも4つの重なり合うテーマの位置付けが示されている。それらは、音楽や音楽に関連する様々な交わり方、生徒の経験や興味の内容に即して互いに関連づけるのに特に適している。その際、教師はこれらの表面的な関わりを気にせずに、それぞれテーマの位置に応じて特定の重点を据えることが可能である。個々のテーマの順序と授業での取扱いの強さは教師に委ねられている。他の教科にまたがる課題を多様な方法で取り入れることが可能である。

#### 組織

7年生から音楽は選択必修科目、10年生においては選択科目となる。これらの学年では、生徒の独特な素質や可能性に応じて、特に活動的な演奏や創作の領域でより広い世界が与えられることになる。クラス授業の枠を越えて、生徒はともに研究グループを見つけ出すのである。音楽の演奏は学校生活を豊かにし、基幹学校のイメージを世間に刻み込む。

#### 概要

- [5 学年]
  - ・音楽で演奏する—演奏としての音楽
  - ・音楽を見る—絵を聴く
  - ・音楽で旅をする
  - ・私たちの周辺にある音楽—音楽のある日常
- [6 学年]
  - ・劇の中にある音楽
  - ・音楽とプログラム
  - ・音楽におけるジョークとユーモア
  - ・音楽が何かを伝達する—対話の中の音楽
- [7 学年]
  - ・音楽史
  - ・音楽が作品になる
  - ・音楽と動き
  - ・音楽の効果 — 音楽による操作
- [8 学年]
  - ・音楽のある人生 — 音楽のある生活
  - ・音楽が挑発する
  - ・音楽とコンピューター
  - ・音楽の中の動きと静寂
- [9 学年]
  - ・リズム — 構成された時間
  - ・無意識になる手段としての音楽
  - ・音楽とメディア—ビデオクリップ、映画音楽
  - ・ヨーロッパ伝統音楽主要作品との出会い

【M10 学年】・現在話題になっている音楽

- ・グループでの音楽
- ・音楽劇
- ・より大きな音楽作品

### Ⅲ.1 基幹学校 5 学年から 9 学年のための教科カリキュラム

#### 【5 学年】

#### 学年の特色

基幹学校に入ることは、生徒にとって新たな人生の時期の始まりを意味する。校舎や通学路はしばしば新しくなるが、学校の場所さえもしばしばそうなる。クラスは様々な出身の生徒から構成されている。同様にクラス担任は新しくなり、担任の他に各教科を教える多数の教師が存在する。概観が容易な基礎学校(Grundschule)の教科から、より専門性の高い授業が展開する。これは、子どもたちが新しい環境と同様に、新しい人や新しい要求とも取り組まなければならないことを意味する。クラスでは、自分の場所を発見することや、自分の興味を共同社会の必要性和調和させることが、個々人にとって重要である。

#### 発達心理学の観点

生徒は、これまでの同級生の大部分がより程度が高いとみなされる別の道を歩むという経験を克服しなければならない。このことは、自分の要求、ないし家族の要求に答えなかった、という感覚ともしばしば結びついている。それをもって、まさにここで新たな自覚を作り出すために、今後引き続く学年の共同作業の基礎として、自分の能力や自分の将来への自信と確信を作り出すことが重要である。そうすると、この年齢の子どもたちは、まったく好奇心が強く、心を開いた状態で、基幹学校の要求に取りかかったり、成績に備えた態度を發展させたりすることができる。教師の理解と配慮を経験することは、そのための基礎的な前提条件である。10 歳と 11 歳の子どもたちは、主として具体的・直感的に考える。彼らが最大の学習成長を遂げるのは、ふるまう行為を通してである。しばしば、創造的な活動の大きな感動の喜びと楽しみは、限られた忍耐力と集中力に對立している。今日ますます早く始まる思春期は、男子と女子を様々な身体的、精神的発達へと導くが、そこからまた様々な態度が結果として生じる。

#### 教育と授業の重点

生徒は、共同生活の形成のために、クラスで授業

する教師たちとともに態度を規制することを發展させる。これはクラスの共同社会や学校の共同社会の促進に役立つ。彼らは、快適なクラス環境のために、相互の敬意と相応しい交際が不可欠であるということ学ぶ。さらに、とりわけ開けた授業形態を通して自立と他の重要な能力を獲得するが、このような際には定められた規則や秩序の原則を守ることが成果のある学習や作業のための重要な前提条件であると認識することもまた重要である。そのためには、自分の作業の意識的な精巧な仕上げ、わかりやすいノートの取り方、真剣な作業姿勢の他に、人々が学校や家庭での作業場と作業方法を形作る支援方法を習得することもまた必要である。それぞれの教科カリキュラムの基礎の上に、教師と生徒と一緒に学年のための作業プログラムを作成する。その際、学習技術と作業技術の習得が重点になる。この意味では、あらゆる種類のテキストやメディアから情報を採集したり取り出したりすることに、特別な重要性が当然与えられることになる。静かな作業や個人の作業、パートナーとの作業、グループ作業のような基礎学校で精通している学習の社会的形態は、とりわけ活動型の学習形態を与える企画志向の方法と同じくらい支援される。自らの結果を呈示することは、とりわけ卒業試験のための準備として機能する。

#### 音楽 5

##### 5.1 音楽で演奏する — 演奏としての音楽

##### 学習目標

生徒は演奏することによって音楽とつきあう可能性を試す。そのとき、彼らはルールの可能性を知り、自分自身で模範演奏を考えだすことを学ぶ。作品づくりを試みるとき、彼らは音楽の基本的な知識を習得する。彼らは様々な時代の音楽学の演奏形態を知り、それについてよく考えることになる。

##### 学習内容

##### 5.1.1 演奏 — 歌

- ・例えばローレプレイングの歌、物語の歌、場合によってははなぞなぞの歌
- ・歌うこと、声をイメージするという視点を取り入れること
- ・楽器で簡単な伴奏声部を演奏すること
- ・場合によっては、劇の構成要素を取り入れること

##### 5.1.2 演奏と演奏の構成上の試み

- ・例えば、リズム演奏、反応演奏、音符のさいころ

遊び、音ドミノ、聴き遊び、ロンド遊び、さいころ作曲、構成要素を用いた遊び

- ・模範演奏との対照や必要な音楽知識の習得
- ・可能なら、グループやクラスで演奏のアイディアを自主的に開発したり試したりすること、場合によっては即興の技術を取り入れること
- ・可能なら、自分自身の音の構成要素やそれらのコンビネーションについての構想を開発したり試したりすること
- ・音楽的な動きに替えること：絵、出来事、状況など、動きを取り入れること
- ・開発した流れを演奏すること、批判的に聴いて場合によっては改良すること
- ・年齢に適した例を聴くこと、楽譜のテキストを切って共に読むこと、場合によっては図形楽譜
- ・批評の対象となる作品のテーマの転換についてよく考えること

#### 5.1.3 音楽を用いた舞台劇

- ・例えば、劇場の舞台、影絵芝居、仮面劇あるいは人形劇、ダンス劇
- ・劇を作ること、教師あるいは生徒から出されたレパートリーの中で適合する音楽を選択すること、音楽的形成を試みることへの関わり
- ・音楽と劇の演じ方の調整；上演、ビデオ撮影
- ・年齢に適した例を聴いたり描写したりすること

### 5.2 音楽を見る — 絵を聴く

#### 学習目標

生徒は、作品づくりを試みる時、音を絵によって描写したり、絵を音に置き換えたりする様々な可能性を試す。彼らはそのとき音符の可能性と限界を通曉する。また、楽譜をたどったり、楽譜を手にして楽曲をたどったり、楽譜に従って簡単な音楽の進行を自ら演奏することを学ぶ。彼らは、絵と音楽の結びつきの特別な影響の仕方を認識する。

#### 学習内容

##### 5.2.1 絵の楽譜と絵の音

- ・音楽の流れを図で表す様々な可能性を試すこと
- ・図による記号を音に置き換えること、結果を判断すること
- ・実際にある図によるスコアを聴いて追体験すること

##### 5.2.2 楽譜の基礎

- ・様々な時代や文化の楽譜について考察すること

- ・自分自身の歌や演奏および音楽の聴取との関連の中で、記譜法の基礎的な知識を習得すること
- ・自分自身の作品を試作するときに楽譜を用いること（例えば、クラスソングの作品）
- ・楽譜を手がかりにして、簡単な音楽構造を追体験すること（例えば、遊びの曲）
- ・様々な由来をもつ音楽を聴く折に、楽譜のテキストと対応させること

#### 5.2.3 絵に応じた音楽 — 音楽に向かう絵

- ・絵と関連する音楽作品や音楽に関連する絵を聴いて比較すること；共通点と相違点とを確認すること
- ・映画の一部分から、どのようにして音楽と絵が協同しているかを確認すること
- ・自分自身の作品の試演：例えば、音楽を描いたり、絵を音に置き換えたりすること；一連のスライドまたは映画を音楽と組み合わせたり、音の彫刻をつくったりすること

### 5.3 音楽で旅をする

#### 学習目標

生徒たちは、自由に使える方法を用いて、自国の様々な文化の環境や異文化の、歌、ダンス、音楽作品をつくる。彼らは、聴いたり演奏したりすることによって、共通点と相違点を確認できる。また、性質の異なる音楽表現の可能性についての理解を発展させることになる。異なる起源をもつ音楽の聴取によって、彼らは音楽の特徴や機能を識別する。

#### 学習内容

##### 5.3.1 自分自身の音楽 — よその音楽

- ・故郷の歌や外国の歌を歌ったり演奏したりすること
- ・様々な文化や国のダンスについて、場合によっては自分自身の音楽伴奏を用いて、練習し覚え込むこと
- ・外国の同級生の知識や才能を取り込むこと
- ・他文化の楽器、実演を用いて
- ・可能なら楽器の制作

##### 5.3.2 音楽の旅（プロジェクトとして相応しい）

- ・旅のルートないし、枠組となる筋の計画
- ・様々な文化の歌や音楽作品、ダンスを組み立てたり練習して覚え込んだりすること
- ・厳密な進行計画に応じていくつかの演奏を組み合わせること

- ・衣装や小道具を取り入れること
- ・適切な場において上演すること（例えば PTA の集まり、学園祭）、場合によってはビデオ撮影

### 5.3.3 旅の中の音楽家

- ・旅中にしばしば現れる歴史上の作曲家（例えばモーツァルト、ヘンデル）の伝記、場合によっては映画を取り入れること
- ・昔の旅の状況を今日と比較すること
- ・作品を聴くことにより、または楽譜に即して主要な構成方法を見つけ出すこと

## 5.4 私たちの周辺にある音楽 — 音楽のある日常

### 学習目標

生徒は、自分が一日の経過の中で、また自分の周辺で、どのように音楽と直面しているのか、自覚することになる。彼らは音楽の様々な作用の仕方と対決し、音楽環境を意識的に構成する可能性を試す。

### 学習内容

#### 5.4.1 私たちの周辺にある音楽

- ・私たちの環境の中で鳴り響いている音楽に意識的に気づくこと、実例を集めること
- ・状況や機能、様式について関係づけること
- ・音楽が、どんなときにどのように実演されるか調べる、楽器について学び知ること、場合によっては同級生を通して、可能なら教会のパイプオルガンを演奏すること
- ・音楽グループの中で生徒たちの経験について報告すること
- ・可能なら音楽施設を訪問すること
- ・好みの違いについて話すこと、考えや考え方を根拠づけること

#### 5.4.2 音楽と騒音が私たちに影響を及ぼす

- ・様々な音楽が聞かされたり作用させられたりする、その作用を記述すること
- ・聴覚障害の危険
- ・意識的に静寂を体験すること

#### 5.4.3 音楽のある日常を形成する

- ・例えば緊張緩和や刺激など、様々な目的に相応しい音楽の模範を組み立てること
- ・例えば刺激または緊張緩和など、目的を定めて音楽を指定する
- ・選出された音楽を様々な機会に上演する（例えば、休憩中の音楽、学校祭）
- ・可能なら、クラスを越えた集団へ参加すること（例

えば、合唱団、楽器のアンサンブル、ダンスグループ）

次のような音楽の基礎知識はいくつかのテーマの範囲と関連して身につけることができる：

音価と休符（全音符から 16 分まで、付点）；簡単な拍子；楽譜の基礎（ト音記号、音の高さの名称）；音量とテンポに関する専門概念；基礎的な音程；簡単な長調

## 【6 学年】

### 学年の特色

生徒は基幹学校の授業の営みと学校生活に慣れている。クラスでは、共同生活と共同作業を規定する構造が生じている。このような親しい境遇から外へという風に、注意はクラス共同体における生活へと向けられ、また注意は、学校共同体における生活へも強く向けられる。一部はさし出された手ほどき、一部は自分自身で見つけた手ほどきというように、秩序づける行動に関する手ほどきと並んで、今やより広い環境の形成を目指した願望が強められる。特定の教科への好みもますます現れ、興味だけでなく反感もまた生じる。しばしば生徒の個性的な長所と短所がその点で決定的となる。子どもと保護者は、6 学年の終わりに通常クラスか卒業資格コースを決定しなければならないため、これは今やとりわけ重要である。ここでは、教師にとって、特別な感受性を持って助言的に支援することが重要である。

### 発達心理学の観点

思春期による身体的かつ精神的な変化は、今や生徒の生活における幅広い領域を占める。彼ら自身の生涯を求めて追及するにあたって、成長する子どもたちは敏感、批判的となり、しばしば気まぐれでもある。とりわけグループの中の男子は、この時期におけるささいな精神の傷つきやすさを、しばしばがさつさでもって巧みに隠す。つまり、彼らは個々人としてはむしろ心を閉ざしたり、助けを求める信号を送り出したりしているのである。今なお、彼らは主として具体的に考え、直感や行為を通して学ぶ。それにもかかわらず、生徒はまた、距離を置いて観察する態度に向かったり、抽象化した思考過程を遂行したりする。

### 教育と授業の重点

5 学年で着手された重点は、今や継続性と深まりを得る。今なお、クラスでの規制された共同生活

と互いの良い人間関係は重要なままである。課題、義務、および自己責任のある作業の局面においても、作業素材の注意深い扱いを習得せねばならない。筆記による作業の際にも積極的な作業姿勢に基づく精巧な結果が目標である。そのために必要な作業技術は深められ、拡大される。また、基礎的な学習技術は生徒の長所を支援し、彼らに弱点を乗り越らせる助けとなることに成功する。これはとりわけ、彼らが自分の興味をいっぱいに広げたり、彼らの専門知識を授業に持ち込んだりすることのできる場所で成功する。そのために、ますますコンピューターを自由に使えるにつれて、彼らはその合理的な投入を実践し、互いに批評し合う。課題の領域がクラスを越えて生じるが、その中で彼らは学校に対する責任を引き受けるのである。

## 音楽 6

### 6.1 劇の中にある音楽

#### 学習目標

劇へ置き換える様々な可能性と関わる中で、生徒は音楽や文化的な生活との関係を強める。プロジェクト型の活動や教科をまたがる活動において、彼らは自分自身の興味を強め、創造的な才能を発見したり試したりする。

#### 学習内容

##### 6.1.1 歌と楽劇

- ・相応しい（場合により、自分自身で考案したあるいは作り変えた）歌を歌ったり演奏したりすること、演奏表現と結びつけること
- ・可能なら、それ自身は劇として構想された表現を音楽に置き換えること

##### 6.1.2 劇に転換された音楽作品

- ・劇への転換に適した音楽作品（例えば、プログラムミュージック、バレエ、映画音楽、ポップミュージックやロックミュージックの作品）を聴いたり批評したりすること
- ・音楽作品と一緒に選び出すこと；音楽を即興的に動きや劇に置き換える可能性を試すこと
- ・劇へ転換するという考えを、場合によっては共同作業で発展させ確かめること。例えば、影絵、人形劇、パントマイム、バレエの振り付け
- ・結果を、場合により上演、ビデオ撮影によって確かめること

##### 6.1.3 音楽劇場

- ・人間の基本的な場面を用いた、よく知られた様々

な劇について学び知ること（例えば、「魔笛」、「賢い女」、「オペラ座の怪人」、「トミー」、「地下鉄1号線」より）

- ・劇の振る舞い、仕草と音楽の転換の関係について話をする、音楽の専門知識を関係付けたり広げたりすること
- ・場合によっては、劇をまねて作ること
- ・音楽劇場の舞台を巡る組織や毎日の仕事について情報を集めること
- ・可能なら、音楽劇場での上演と一緒に訪れること

### 6.2 音楽とプログラム

#### 学習目標

生徒は、音楽の中でどのようにして音楽以外のことが重要であり得るか、自然と技術の実例によって知る。彼らは、自分自身の日常社会において、自然と技術がどのような意味を持っているのかということについて、よく考える。彼らは活動を通して様々な音楽や音の生産と関わる中で、自分自身の創造的な才能を投入したり広げたりすることを学ぶ。作曲において音楽以外の内容と関わる時、生徒は慎重に意識して聴くよう指導される。

#### 学習内容

##### 6.2.1 自然の音世界 — 音楽の中の自然

- ・可能なら、自然の中の音を集めること（例えば、鳥の鳴き声を録音する）
- ・自然の音を使った作品を聴いたり、それについて話し合ったりすること（例えば、ビバルディの「四季」、ベートーヴェンの「田園」、メシアンの鳥の鳴き声を用いた音楽作品、ポップミュージックやロックミュージックの実例）
- ・場合によっては、自然をテーマとする作品の試作すること

##### 6.2.2 技術の音世界 — 音楽の技術

- ・可能なら、技術の影響を受けた環境の音を集めること
- ・音楽における技術に由来する音の利用ないし、模倣の実例を聴いたり、それについて話し合ったりすること（例えば、Honegger の Pacific231, 具象音楽、スターライト・エクスプレス、コンピューター音楽）
- ・場合によっては、技術をテーマとする作品の試作すること

##### 6.2.3 標題音楽の作品

- ・生徒の興味を考慮して作品を選択すること

- ・音楽と標題との関連を指摘すること、作曲や楽器編成、場合によっては作曲家の生活状況、作曲法の特徴的な部分について批評すること
- ・場合によっては絵や動きに置き換えるなど、与えられた可能性に応じて、個々の部分を実現させること
- ・作品全体あるいはより大きな部分を意識的に聴くこと

### 6.3 音楽におけるジョークとユーモア

#### 学習目標

生徒は実際に音楽に関わったり、演奏あるいは鑑賞した作品について考えたりする折に、音楽におけるユーモアの様々な可能性や効果について知る。取り扱われた作品に基づいた自主作品の中で、彼らは手に入れた音楽理論の知識を用いて創造的な才能をさらに発展させる。

#### 学習内容

##### 6.3.1 ジョークの歌

- ・相応しい歌を歌ったり演奏したりすること、場合によっては楽器を取り入れること
- ・機知に富んだ効果をもたらすために必要な歌詞や音楽の特徴に気付くこと
- ・可能なら、機知に富んだ歌を自分自身で作ること：歌詞や旋律、アレンジを構想すること、練習して披露すること

##### 6.3.2 劇に関連するジョーク

- ・オペラあるいはミュージカルの機知に富んだ舞台を視聴したり、批評したりすること（可能ならビデオの録画を手がかりにして）
- ・実際に可能なら、機知に富んだ劇の作品を試作すること、例えば、適切なもの、場合によっては開発した音楽自体を用いてストーリーの筋立てを企画構成すること、場合によってダンスを取り入れること
- ・場合によっては録音を用いて上演すること、成果について批評すること

##### 6.3.3 作曲とイメージの表現におけるユーモア

- ・音楽で機知に富んだ効果を得る様々な可能性を知ること
- ・歌詞や音楽の共演によるユーモア（例えば、モーツァルトの「カノン」や「魔笛」の場面、ワーグナーのベックメッサーのセレナーデ）
- ・音楽以外の内容を転換する、つまりパロディーにする際のユーモア（例えば、サン・サーンスの「動物の謝肉祭」、ヒンデミットの「ミニマックス」、サティの「干からびた胎児」）

物の謝肉祭」、ヒンデミットの「ミニマックス」、サティの「干からびた胎児」)

- ・音楽を共演する際のユーモア（例えば、ハイドンの交響曲「驚愕」）
- ・場合によっては、音楽と関連したユーモアを情景的に表現したものについて批評すること（例えば、ヴィルヘルム・ブッシュの「ジェラルド・ホフマン」）、自分自身の作品を試作すること

#### 6.3.4 要請を促すジョーク

- ・機知に富んだ方法で具体的な要請を呈示する歌を聴いたり、批評したりすること
- ・場合によっては、自分自身の作品を試作すること

### 6.4 音楽が何かを伝える — 対話の中の音楽

#### 学習目標

生徒は、自分自身で試すことを通して、また多様な音楽の実例との対決を通して、音楽で情報や気分、緊張状態、緊張の経過をどの程度仲介され得るかを知る。共に音楽活動することによって、彼らは音楽の情報伝達表現の可能性に敏感になる。

#### 学習内容

##### 6.4.1 音楽の情報

- ・シグナルの効果を持つ音を集めたり、批評したりすること（例えば、目覚まし時計、塔の時計、サイレン、ヨーデル、休憩を知らせるゴング、アルプホルン）
- ・音を通して情報伝達の例を聴くこと（例えば、アフリカのトーキングドラム、）
- ・様々な時代や様式範囲の音楽作品におけるシグナルを識別したり、意味との関連についてよく考えたりすること
- ・場合によっては、音楽による情報伝達という考えを発展させること

##### 6.4.2 音楽による会話

- ・対話の構造をもつ歌を聴いたり演奏したりすること
- ・声と楽器を用いて情報伝達演奏をしたり作品を試演したりすること（例えば、トーキングドラムによる対話、コール&レスポンスの演奏）、場合によっては、即興の技術を取り入れること
- ・会話の要素をもつ作品を聴いたり、それについて話し合ったりすること（例えば、グレゴリオ聖歌のレスポンソリウム、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番2楽章、ジャズやロックミュージック

におけるコール&レスポンス)

#### 6.4.3 音楽における気分

- ・作品を試作する際、音楽で気分を表現すること
- ・気分が表現されている実例を聴いたり、批評したりすること（例えば、標題音楽、映画音楽から）
- ・実際に可能なら、音楽で伝達している雰囲気や絵やダンスによる伝達に変えること
- ・場合によっては、短くて特徴的な雰囲気に満ちた場面・情景を見つけること、音や騒音で音楽を替えること
- ・意図的に雰囲気を作り出す歌を音楽的につくること

次のような音楽の基礎知識は個々のテーマの範囲と関連して身につけられる：

様々なリズム、複雑な拍子、拍の変化、長調と短調の比較（三和音、音階）

#### 【7学年】

##### 学年の特色

この学年の大部分の生徒は、通常クラスで基幹学校を終える。彼らにとっては、今やうまく職業生活へ乗り込むことができるように能力を集結することが重要である。場合によっては、新しいクラスが構成されるかもしれない。あるいは学校の場所さえも変わるかもしれない。それゆえに、この学年の重点は、新しいクラス共同体での共同生活を発展させることである。生徒は規則と礼儀作法および必要な作業方法を習得し、それらを覚え込む。彼らは、その際、自分の自信と自尊心を深めることになる。これはまた、青少年の個性的な興味が可能性と承認を受け、批判的な保護を経験するということを含む。そのようにして、彼らは、教師やクラスの仲間の助けを借りて、クラスと同様に個人の成長過程においても自分の場所を見つけることができる。

##### 発達心理学の観点

大部分の青少年は今や思春期にある。他のクラスの仲間は卒業資格コースへの道を手に入れており、もしかすると自尊心が損なわれるために、不安を抱く生徒が増えるかもしれない。伝統的な権威、大人、学校や学校外の共同社会の規則、強制と感じられる学習は疑問視される。意味を追求するこの時期には、集団や徒党を組むことによって支えや承認を与えられることが多い。青少年は今なお別の世代から区別されている一方で、最初の仲間社会が発展している。

しかし、この局面を人間的に思いやりのある形で経験するなら、若者はこの困難な局面においてもまた、愛情や慰め、賞賛に対して、また徹底した排斥に対しても同様に、心は開放的である。成功に導くような実際の活動や具体的ではっきりした題材を持つ行動型の授業は、とりわけこのクラスの学習状況の意向に沿う。

##### 教育と授業の重点

まさに、思春期の観点のもとでは、また、場合によっては変化したクラスの状態のもとでは、共同社会における共同生活が重要な役割を演じる。時々傷つけられたり、大人社会に対する境界を表現する会話態度は、慎重な、時には状況に適した指導を必要とする。同時に、率直で他人に対して寛大さを目指した授業が、性質の異なるものすべてを否定的に見るような、集団傾向に対抗せねばならないこともある。様々な民族的起源をもつ同級生の間で、良い仲間を得ようと努力し、異なる基盤に対する互いの興味を発展させなければならない。異文化や他の宗教の人、障害を持った人、アウトサイダー、年配者に対する尊敬の念が、重要な教育目標である。これは、クラスの会話や他者の意見に対する尊敬の中で始まる。徐々に学校の目的の役に立つだけでなく、生涯学習の準備をさせる作業技術や学習技術に一貫して注意を向けさせることが重要である。その際、生徒はとりわけ自主的に情報を読み、引き出すことについて励ましを受けることになる。彼らはこの作業方法を開放的な授業形式やプロジェクト型の計画の中で適用する。

#### 音楽 7

##### 7.1 音楽史

###### 学習目標

生徒は、歴史的な音楽を扱うことによって、音楽と歴史的脈絡や社会的脈絡との連携、また、様々な時代において技術の発展と音の理想との相互関係を知る。音楽との積極的な関わりの中で、生徒は、自分自身の音楽経験をそれに匹敵する音楽の伝統と関連づけることを学ぶ。

###### 学習内容

##### 7.1.1 歴史のある歌 — 歌における歴史

- ・様々な時代の様々な主題技法を用いた音楽を歌うこと（例えば、中世の歌、賛美歌、国歌）
- ・実際に可能なら、楽器による伴奏を開発したり演奏したりすること



- ・歌詞の内容やそれらの歴史的背景と取り組むこと、可能なら、他教科と協力すること、歌の主題技法について展示板をつくること
- ・現在、それらの歌にどのような関係付けが可能かを見つけ出すこと
- ・様々な時代からの歌詞の実例（例えば、バラード、モリタート、ポップソング、ロックバラード）に曲をつけること
- ・実在する旋律あるいは自分自身で考えだした旋律（例えばモリタート）に合わせて歌詞を開発すること、音楽や場合によっては劇を実現させること（例えば、クラスの夕べの催しで）

### 7.1.2 音楽が物語る

- ・標題音楽（例えば、デューカスの「魔法使いの弟子」、スメタナの「モルダウ」）の領域からの実例を聴いたり比較したりすること
- ・オペラ、ミュージカル、ロックオペラ等々の舞台
- ・音楽とプログラムあるいは音楽、歌詞と舞台での動きとの関係に気付くこと
- ・聴取や楽譜に応じて音楽の表現方法を挙げること
- ・必要な音楽知識を習得すること、例えば、交響管弦楽の楽器や構成、管弦楽の総譜）
- ・絵画や動き、あるいは舞台の演技を通して、音楽の物語をつくること

### 7.1.3 昔の音楽 — 今日の音楽

- ・音楽の楽器あるいは楽器のグループの歴史と構造、例えば鍵盤楽器（クラヴィコードからキーボードまで）、撥弦楽器（リュートからエレキギターまで）、可能なら博物館等々の訪問
- ・類似した特徴を示す時代の異なる2つの作品を比較すること、（例えば、類似した機能や構成をもつ作品、編曲されたもの、伝統的な作品のロックバージョン）
- ・様々な時代の音楽の社会的背景に関する情報や素材を集めたり比較したりすること、例えば、貴族の館と今日の音楽ホール

## 7.2 音楽が作品になる

### 学習目標

音の実例について聴いたり記述したりグラフィックアートのように描いたりすることを通して、生徒は多様な秩序の原理が音楽の基礎であることを知る。自分自身で演奏する際に、音楽の形式が経験され、試され、時には作られる。つまり、聴覚がより広い範囲で鍛えられる。また、音楽を身

体の動きに替えることを通して、生徒は音楽の形式について部分と全体における秩序として経験する。

## 学習内容

### 7.2.1 形式と動き

- ・様々な様式の音楽作品を、形式の進行に一致する動きに替えること、場合によっては、簡単な振り付けを開発すること
- ・歴史的脈絡にある音楽作品とダンスとしてのメヌエット

### 7.2.2 絵と音楽における形式

- ・音楽の形式を絵に置き換えること（例えば、クレーの場合）
- ・音楽の形式を絵に置き換えた自分自身の作品を試演すること

### 7.2.3 音楽の形式

- ・ロンド形式の構造を、聴取によって認識したり、絵で表現したりすること
- ・リズムの素材を用いて自分自身のロンド（例えば、おしゃべりロンド）をつくること、即興を取り入れること
- ・聴取や楽譜を手がかりにして変奏を認識すること
- ・作品の試作：様々な方法で、有名な旋律を変化させること（例えば、装飾音、目新しいものにする）、結果について論評すること

### 7.2.4 形式の要素

- ・リズム法や旋律法、あるいは和声法の典型的な形式の原理が呈示されている実例を聴くこと（例えば、繰り返し、変化、対比）
- ・様々な種類のモチーフを聴いたり、歌ったり、演奏したりすること
- ・旋律とリズムを聴いたり、書き留めたり（伝統的な楽譜あるいは図形楽譜）、表現したり、それを用いて即興演奏したりすること
- ・聴いたり演奏したりして、和声の動きを知ること、変化しない和声と変化する和声を区別すること、和声や形式を構成する方法としてカデンツ

## 7.3 音楽と動き

### 学習目標

音楽の表現形態や構造を動きに替えることによって、生徒は、精神的な運動能力をさらに発展させ、表現手段として体を理解する。そのとき、彼らはいくつか自由な動きや様式化された動きの可能性を知り、音楽理解の手段としての動きを知る。

彼らは聴覚および空間的また時間的な知覚能力を敏感にする。

## 学習内容

### 7.3.1 動きと表現

- ・体の動きを持つ典型的な音楽の例を模倣すること
- ・表現ダンスの実例，例えばバレエから
- ・共通して選び出された音楽に合わせて小さな劇を開発すること，ボディーランゲージを取り入れること，場合によってはビデオ録画

### 7.3.2 踊り

- ・様々な時代の簡単な踊りの作品を演奏すること
- ・様々な時代や様式の領域から，実用的なダンス音楽や様式化されたダンス音楽（例えば，民俗舞踊，踊りの組曲）を用いた実例を聴いたり，比較したりすること
- ・様々な踊り（例えば，パヴァーヌ，メヌエット，ポロネーズ，フォックストロット，ロックンロール，ディスコ，場合によっては体育の授業と協同して）に合わせて簡単なステップのつながりを身に付けること，場合によっては，振り付け師による作品を拡大させること，ダンス表現の要素を結びつけること

## 7.4 音楽の効果 — 音楽による操作

### 学習目標

生徒は，音楽の身体的あるいは精神的な効果の方法と取り組み，ねらいを定めた音楽の投入の可能性と限界に関する意識を発展させる。ラジオやテレビの宣伝の実例によって，彼らは，どのような方法で音楽が操作の目的のために利用されるのか，その具体的な方法と成功の秘訣を知る。また，実際に自分自身のスポットコマーシャルをつくるとき，実際に自分の認識を応用する。

## 学習内容

### 7.4.1 音楽の効果

- ・様々な聴く状況で自分の体験した音楽の効果について話し合うこと
- ・音楽の操作的な効果に関する実例を集めたり，調べたりすること（例えば，政治的な歌）
- ・積極的效果と消極的效果を意識化すること

### 7.4.2 広告の中の音楽

- ・標的とする集団や宣伝方法，音楽の役割に関して，ラジオあるいはテレビのスポットコマーシャルを

調べること

- ・企画提案：場合によっては斬新なスポットコマーシャルを構想したり実現させたりする，できるならドイツ語科目との協力
- ・それについて相応しい音楽を選択したり，構想したり演奏したりする
- ・可能なら，テープ録音あるいはビデオ録画，成果の実演，反応との取り組み

## 【8 学年】

### 学年の特色

職業の選択が，この学年の中心になる。企業探索や企業実習，職業相談は，個人の能力や好みを明らかにしたり，強化したりしようとする。また，彼らは明確な職業希望を可能な訓練場と一致させようとする。クラスのメンバーは自分自身を知り，学校時代を終える準備をする。しかし，そのために必要な落ち着きや継続性は必ずしも与えられるわけではない。他校種から復帰した者や，この学年で就学義務を満たすクラスのメンバーは，しばしば異なる課題を抱え，それらを克服することは困難である。担任教師はここで，それぞれの生徒の興味と同様に，クラス共同社会と学校共同社会の共通する要請にも応じる道筋を探さねばならない。

### 発達心理学の観点

成長する者にとって，彼ら自身の生活に対する見通しがそろそろ明確化してくる。この学年を経過する中で，目標が発展し，内面的なためらいが消えて，どちらかという積極的な気分に向かっていく。このことは多くの生徒では成績評価への準備を促進する。より親密な友情や初めての恋愛は，自立への道を支援するが，脇へそらす要因も意味するかもしれない。しかし，さらに自分の中に引っ込んだり，人間の接近や成績を拒んだり，このような消極的な役割に加えて，しばしば妨害者としての地位を占める生徒も存在する。個人的な援助のほか，解決可能で，個人の満足や賞賛を作り出す課題を与えることが，助けになるだろう。もっとも，学校は学校のやり方ですべての問題事情を解決することができるわけではない。学校は，場合によっては，マイナスの影響を防ぐことで我慢しなければならない。生徒は，これまで以上に自主的に作業をしたり，より細かく観察したり，しだいに抽象的に思考したりすることができるようになる。要求の多い課題は，資格を取って（10年で）基幹学校を卒業しようと努力する人

たちのために、道を開いていく。

### 教育と授業の観点

労働社会との出会いがこの学年の主要なテーマである。労働－経済－技術、ドイツ語、その他の教科もまた、このため切の援助を提供する。生徒が自分の作業を組織立てることができ、念入りに作業をし、信頼でき、熟知し、繰り返し深められた作業技術と学習技術を用いて依頼された課題を専門的に正しく解決したり、提供された機会を利用したりすることができるということは、以前よりもいっそう重要である。そのためには、雇用主との礼儀正しい出会い、自己紹介の挨拶、および願書や履歴書のような規格化された文書形式の使用が必要である。その際、クラス内外のやりとりの中で、自分の意見を主張したり、他人の意見を尊敬したりすることが重要性を持ち続ける。用意された課題を処理したり、多くの生徒に見られる消費傾向やこれに類した身体的受動性の傾向に抵抗するために、健康な食べ物、嗜好品や習慣性のある飲食物を避けること、および生活全体を保証し得る種類のスポーツとの出会いが必要である。

## 音楽 8

### 8.1 音楽のある人生 — 音楽のある生活

#### 学習目標

様々な時代の音楽家の伝記について討論することにより、生徒は音楽が人生の形成にどのように影響しているかを知る。彼らは、音楽技能を習得することが個人ならびに共同社会にとってどのような意味を持ち得るのか知ることになる。

#### 学習内容

#### 8.1.1 音楽する仲間

- ・音楽に対して活動的な仲間に、その音楽的な経歴と経験について質問すること
- ・場合によっては、最も身近な楽器の演奏や練習を経験すること
- ・私たちの時代に音楽へ積極的に取り組むことの条件や意味について話し合うこと

#### 8.1.2 私たちの時代の音楽家

- ・生徒の愛好に応じた音楽家を選択決定すること、例えばポップ・ロックの分野から
- ・その人に関する伝記・記録の事実や言明を集め、活用すること
- ・イメージの形成や青少年への影響について討論すること

ること

- ・音楽の実例を聴くこと、場合によっては歌詞について討論すること
- ・実際の可能性に応じて、選び出した作品を真似てつくること

#### 8.1.3 歴史的に重要な音楽家（例えば、バッハ、ベートーヴェン）

- ・生涯の歴史を探り出すこと：例えば、事典、伝記、論文、手紙、日記から事実を集めること
- ・音楽教育の条件を今日の実情と比較すること
- ・結果を提示すること（例えば、掲示板への展示、ビデオ、ラジオドラマ）
- ・作品あるいは作品の一部分を聴き、それについて記述すること
- ・可能なら、相応しい作品あるいは作品の一部分を演奏すること

## 8.2 音楽が挑発する

#### 学習目標

生徒は、社会的な弊害や定着した聴取習慣に反し、挑発する音楽の実例を、音楽の様々な分野から学び知る。音楽と言語による表現手段について、実際の、理論的な取り組みを集中して行うことにより、彼らは挑発効果の方法を探り、考え方の衝突を利用してプラスの変化を引き起こす可能性についてよく考えることになる。

#### 学習内容

#### 8.2.1 歌による挑発

- ・歴史や現代の中から挑発的な内容を含んだ歌を歌ったり、聴いたりすること
- ・歌詞の内容や挑発的な効果の背景について話し合うこと（例えば、音楽と歌詞の関連）
- ・場合によっては、弊害に反抗した歌や変革の可能性を指摘した歌を自分自身でつくること（有名な旋律に合わせて歌詞を構想すること、あるいは、自分自身で歌詞と旋律をつくること）

#### 8.2.2 20世紀の音楽における挑発

- ・生徒の聴取経験の枠を超えた作品の一部分を聴くこと（例えば、アイヴス、ペンデレツキ、ヴァレーズ）
- ・伝統の枠を超えた音楽的手段に気付くこと（例えば、複調、無調、騒音の使用、4分の1音）、場合によっては自分自身の作品づくりに挑戦するときを試してみること
- ・前衛的な作曲について討論すること（作曲家のプ

- ・プロフィール、音楽の意図、活用方法、楽譜）、場合によっては作品の一部分を独自に辿ってみること
- ・聴き慣れない音楽と集中的に取り組むことを通して、聴く習慣の変化について話し合うこと
- ・可能なら、作曲家と話すこと

### 8.2.3 ポップ・ロックミュージックにおける挑発

- ・発達の様相も様式の方角も異なる様々な実例を聴いたり、批評したりすること、歌詞との関連で音楽的手段を記述すること
- ・ポップ・ロックミュージックの実演や商品化についての情報を集め、活用すること
- ・挑発の裏にあると考えられる背景について討論すること（例えば、自己宣伝あるいは変革への意志、年齢特有の抗議体勢）
- ・利用可能な手段を用いて歌を歌ったり、演奏したりすること、場合によっては新たな歌詞を作ること
- ・可能なら、ロックミュージシャンと話すこと

## 8.3 音楽とコンピューター

### 学習目標

生徒は、音楽にコンピューターを投入する多様な可能性を認識する。彼らは学校にあるハードウェアとソフトウェアを試し、作品づくりを試みる。

### 学習内容

#### 8.3.1 コンピューターの音楽的活用の可能性

- ・様々なプログラムを試すこと、例えば、音楽理論一般あるいは聴覚教育のため、作品の考察あるいは楽器学のための互いに関連したプログラム、その際、音楽の基礎知識を復習したり深めたりすること
- ・場合によっては、楽譜の形の音楽データを鍵盤あるいはキーボードへと置き換えること
- ・場合によっては、反復進行のプログラムを用いて蓄えられた音楽進行を編曲すること
- ・可能なら、楽譜と音のタイプを比較すること

#### 8.3.2 “コンピューターミュージック”をつくってみる（プロジェクトに相応しい）

- ・利用可能な音楽的手段を使って構成すること（コンピューターで生じさせ得る響き、場合によっては伝統的な音楽の楽器）
- ・テーマや音楽の授業計画について皆で決定すること、場合によってはマルチメディアや劇への拡大を含めて

- ・分業的な授業方法で個々の要素を実現化すること
- ・進行のための要素を組み合わせること、練習
- ・可能なら、適当な場面（例えば、学校のコンサート、PTAの集まり）で演奏すること、録音テープなど、ビデオ録画

## 8.4 音楽の中の動きと静寂

### 学習目標

生徒は音楽創作の基礎である“動き”と“静寂”と取り組む。歌や演奏、ダンス、また内省的に聴くことを通して、様々な様式や文化の音楽に対する理解をさらに発展させ、集中的な音楽経験を十分に行うことになる。

### 学習内容

#### 8.4.1 ダンスにおける動きと静寂

- ・フォークダンス、ロックンロール、民族音楽、メディア音楽の分野からのリズムとしては様々な音楽に合わせて自由に動くこと
- ・覚え込むこと、場合によっては静寂と動きの要素が交互に含まれたバレエタイプのダンスを自主的に発展させること
- ・場合によってはそのとき得た経験について話し合うこと

#### 8.4.2 実際に音楽を作る際の動きと静寂

- ・音と音の連続の実験を行うこと、夜、夢、ラッシュアワー、狩り、スケートなどの概念やキーワードに合わせて簡単な音の像をつくること
- ・場合によっては、動きと静寂を用いて、複雑な音の像をつくること、例えば、高揚と後退、交互変化などのある
- ・場合によっては、図による表現あるいは絵画的な作品に挑戦すること

#### 8.4.3 様々な文化の音楽における動きと静寂

- ・動きと静寂の観点から選出された様々な音楽文化の実例について学び知ること
- ・ヨーロッパ音楽の伝統作品と、動きと静寂に関して異なる文化領域の音楽作品の構成とを比較すること
- ・鑑賞により、また、楽譜を手がかりにして、音楽的手段に気付くこと
- ・場合によっては、静寂と動きとの関連で、緊張がいかに経過するかを表現すること、可能なら、図を用いて明確に説明すること

## 【9 学年】

## 学年の特色

この学年の生徒は、この年で基幹学校の就学義務を満たす。彼らは、自身が生活について責任があるということを、前よりもいっそう感じる。彼らは、目標に向かって自分が大いに前に進むことを援助する成績評価の準備に関して、新たな形態を発展させる。その際、規模、入念さ、清潔さ、信頼性に関係して彼らに課せられる課題へのより高い要求を彼らは受け入れる。多くは、資格を取って基幹学校を卒業しようと努力する。それでもなお、クラスには目標もやる気もなく行動する生徒もいる。大部分の生徒は職業を選択している。拒否と失望は乗り切られなければならない。つまり、何人かにとって、将来はまだ未定であり、見通しがつかないのである。

## 発達心理学の観点

終了クラスの青少年は、学校外でしばしば家庭、近隣、支援団体、スポーツクラブ、同年齢の集団において承認されることを経験する。彼らは、彼らの人格について学校でも承認されることを望んでいる。彼らは、自分自身と他人との立場を区別したり、望ましいことと実現できることを見分けたり、物事を操作して効果を確かめる試みを洞察したりすることができる。彼らは、複雑な実態を見抜いたり、抽象的な思考過程を辿ったりできる。他方では、彼らは、助けを与えてくれ、思いやりをもって客観的な会話で受け入れてくれる理解ある話し相手を必要としている。

## 教育と授業の重点

授業は資格を取って基幹学校を卒業するために定められている。大部分の生徒はそれ为目标に準備をする。個人でもグループでも彼らは計画的に物事を進めることができなければならず、身に付けた方法でパートナーといっしょに目標に向かって問題を解決し、課題に取り組まねばならない。その際、生徒は試験の進行に関しても手ほどきを受ける。言語行為の能力訓練は、これまでと同様に重要である。責任を自覚したメディアとの交わりは、労働社会との出会いと同じくらい教え込まれる。これは自分の成績に対する責任、到達した結果、発言力のある実演を含んでいる。学校で最も年上の生徒として、年下のための援助を信頼をもって引き受けることによって、あるいはプロジェクトによって彼らが豊かにする学校生活での位置づけもまた変わらない。

## 音楽 9

## 9.1 リズム — 構成された時間

## 学習目標

生徒は自分の行動において、また、聴くことによる実感を伴った理解において、リズムの様々な表し方を時間の構成手段として学び知る。基礎的な知識や技能に基づいて、様々な音楽様式のリズム楽器を演奏することによって、彼らは実体験を得る。動きを取れ入れた作品をつくってみるとき、彼らはリズムの手法を用いて自分自身を表現することを学ぶ。様々な起源をもつ特徴ある音楽のリズムを集中して聴くことによって、彼らは慣れないことに対する理解や興味を発展させることになる。

## 学習内容

## 9.1.1 音楽の基本要素としてのリズム

- ・体の楽器や簡単なリズム楽器を用いて基礎的な練習をすること、動きと結びつけること
- ・実際の活動と関連した重要な基礎概念（例えば、拍節、ビート、拍子、シンコペーション、不規則なビート）
- ・歌の中の変ったリズム（例えば、不均整な拍子）
- ・表現手段としてのリズムを試すこと（例えば、太鼓による対話、太鼓言葉の開発）

## 9.1.2 ポップ・ロックミュージックにおけるリズム

- ・ドラムセットで基本の型を習得すること
- ・選び出された打楽器を知り、手がかりを得ること
- ・とりわけリズムの基本要素を強調してポップソングを歌ったり演奏したりすること、リズムの即興を取り入れること、ダンスと結びつけること
- ・聴取した実例を比較すること、音量と動きに関連するリズムの効果を記述すること

## 9.1.3 ヨーロッパ以外の音楽文化のリズム（例えば、黒人のアフリカ、南アメリカ、インド）

- ・リズム楽器、場合によっては太鼓の構造について面識があること
- ・与えられた可能性に応じて、基礎的な演奏技能を試すこと（例えば、ボンゴあるいはコンガ）
- ・選び出された音の実例を聴いたり、批評したりすること、よく知っているリズム（例えば付加的なリズム）の形との共通点と相違点を確認すること
- ・可能なら、音楽家を招待すること、コンサートへ行くこと

## 9.1.4 新しい音楽における構成手段としてのリズム

- ・とりわけリズムが明確に現れている音楽の実例を聴いたり、批評したりすること（例えば、ストラヴィンスキーの「祭典」、アイヴスの「Putnam's Camp」、ライヒの「ピアノ・フェイズ」）
- ・打楽器のためだけに作曲された作品や作品の一部を聴いたり、話し合ったり、場合によっては実現すること（例えば、ライヒの「ドラミング」、リーパーマンとフィークの「変換」）
- ・作品をつくってみること：様々なリズム構造でできている音楽の進行（分業による展開、練習して覚え込むこと、実演すること）

## 9.2 意識下に沈潜する手段としての音楽

### 学習目標

生徒は音楽の助けを借りて、人の意識の深い層に呼びかける様々な可能性と取り組む。彼らは緊張を解きほぐすことを学び、聴くことによって、また、つくってみることによって、音楽と瞑想の関連を知る。彼らは音楽による癒しの効果に関する情報を得る。

### 学習内容

#### 9.2.1 音楽による身体的・精神的効果の方法

- ・リラクソの訓練の効果を試すこと、例えば、呼吸のコントロールについて
- ・場合によっては、他教科との関連で示唆する練習をすること
- ・場合によっては、サブリミナルの効果に関する情報
- ・音楽による影響の可能性について話し合うこと、生徒の経験をテーマにすること

#### 9.2.2 音楽と瞑想

- ・緊張を緩和する姿勢で座って、あるいは横になって、瞑想的な音楽の実例を聴くこと
- ・瞑想的な音楽を用いて作品をつくってみること（例えば、瞑想的なミニマルミュージック）
- ・可能なら、瞑想的な手法を試すこと（例えば、座った姿勢、呼吸のコントロール、“マントラ”の集中）、相応しい音楽の実例を取り入れること
- ・場合によっては、瞑想的なダンス

#### 9.2.3 音楽が癒しを助ける

- ・治療に音楽を取り入れることに関する情報を集め、活用すること（活動的、受容的な音楽療法）
- ・可能なら、実際の音楽療法士と話をすること

## 9.3 音楽とメディア — ビデオクリップ、映画音楽

### 学習目標

生徒は、メディアを通して媒介された音楽が彼らの日常に与える影響や、それと関連する可能性や危険性について明白に知ることになる。ある企画において、彼ら自身でビデオクリップあるいは音楽つきの映画舞台をつくる。その際、それぞれのメディアと創造的に関わる条件や可能性を学び知る。

### 学習内容

#### 9.3.1 音楽のメディア情勢

- ・メディアによる音楽媒体の実例をまとめ、批評すること（ラジオ、録音媒体、テレビ、コンピューター等々）
- ・技術のさらなる発展を通じた新たな可能性についての情報（例えば、コンピューターアニメーション）
- ・危険性によく注意すること（例えば、大音量による聴覚障害）

#### 9.3.2 映画音楽あるいはビデオクリップ（選択のために）

- ・選ばれたメディアについて深く考えながら討論すること、例えば、自分自身で考え出した判断基準にならってビデオクリップを分析すること
- ・自分自身の作品を作ってみること（プロジェクトとして相応しい）、例えば、実際にある音楽あるいは自分自身で考えた音楽のためのビデオクリップを構想すること、動きを取り入れること、短い映画に音楽をつけること
- ・適切な枠組みの場合（例えば、クラスの夕べの催し、学校のコンサート）において成果を発表すること

## 9.4 ヨーロッパ伝統音楽の主要作品との出会い

### 学習目標

生徒は、ヨーロッパ伝統音楽の主要作品を演奏と鑑賞の双方で取り組むことになる。彼らは、それぞれの作品の特性や構造に依拠して、作品を理解する様々な可能性を知る。その際、彼らは、音楽体験を歴史や構造、上演条件への取り組みを通して強めることができることを知る。生徒はそれを通して、私たちの音楽生活の多様な現れへの興味を広げ、また、文化的な生活に対する積極的な参加へと促される。

### 学習内容

#### 9.4.1 故郷の地域でのコンサートの機会

- ・偉大な音楽を知る可能性をつくること、つまり、

このような観点で地域でのコンサートの機会を活用すること

- ・親しめる可能性のある作品をみんなで決めること（コンサート訪問の可能性、作曲家と故郷の地域との関係、博物館の中の資料等々）

#### 9.4.2 オーケストラ、合唱団、ソリスト：役割と音

- ・聴取や楽譜によって、音の法則の響きの特徴を説明すること
- ・それぞれの役割の本質的な特性を描写すること（例えば、総譜と関連したオーケストラの音のグループ）、楽器学の実際を復習すること

#### 9.4.3 作曲の構造と効果

- ・聴取や楽譜によって、本質的な音楽構造の諸要素を確認すること、場合によっては自分自身の作品の創作に結びつけること
- ・場合によっては、特徴的な作品の一部分に対して模範演奏すること
- ・場合によっては、動きや図形による作品に置き換えること
- ・音の録音を意識して聴くことによって、形式の構成や緊張の経過を追体験すること
- ・学び知った構造と感情的な効果の関係について話し合うこと

#### 9.4.4 作品とその脈絡

- ・作曲家の伝記や作品の歴史、歴史的・社会的背景、受容の歴史（例えば批評）に関する情報を集め、活用すること、他教科から情報を取り入れること
- ・場合によっては、後に編曲されたものを取り入れること
- ・可能なら、演奏を聴きに行くこと、授業の中での後処理
- ・企画提案：批評した作品に関する案内文あるいはポスターを作成すること、作品の構成要素を用いて音のコラージュ作品を作ること、作品の一部分に合わせてダンスの舞台あるいは戯曲の舞台を開発すること

### Ⅲ.2 基幹学校7学年から10学年の卒業資格コースのための教科カリキュラム

#### 【M10 学年】

#### 学年の特色

大部分の生徒が、この学年で学校への全日の就学を終える。最後に中等教育学校の卒業試験がある。しかし、そのほかに、まだ職業選択が未定の場合には、しばしばそこにエネルギーと集中が要求される。

いずれにせよ、生徒は学校生活の機能に自分自身を十分投入し、これをもって学校における最年長者の模範役を全うする。社会への参加、年下の生徒への支援、委員会や企画における責任ある役割が、彼らに來たるべき課題への準備をさせる。

#### 発達心理学の観点

青少年は、外見上は身体的、精神的、情緒的に安定した状態で活動する。彼らは、適切な評価を行い、要求を評価し、十分に考えた上で決定を下すことができない。この年齢で、彼らはパートナーシップの関係を受け入れ、またすでに社会に關与している。彼らはそこで承認を経験する。しかし、彼らはしばしば見たところほど安定してはいない。例えば、学校で失望、職業選択、パートナーに関する方向づけの難しさやそのような場で生じる危機は、依然として信頼できる人物による助けの保護を必要とする。それでもなお、自立と主体的な自己責任が成長していく。

#### 教育と授業の重点

主眼は試験の準備にある。生徒は、個人的に有能であるのと同様に、5学年以来獲得した作業方法を用いるチームにおいても有能であることになる。彼らは、試験における要求内容と進行を知り、達成のための補助具を習得する。彼らは情報を受け入れ、その際、事態を複合的に考え抜くことと関係を作り上げることを学ぶ。そのようにして獲得した知識を、自分自身の準備のために活用するのと同様に、クラスでの実演のためにも活用する。これには、メディア、とりわけコンピューターの導入を必要とする。生徒は、責任ある生き方や他人との秩序ある共同生活の問題に取り組む。

#### 音楽M10

##### 10.1 現在話題になっている音楽

#### 学習目標

生徒は、演奏と鑑賞によって、現在話題になっている様々な様式の音楽と取り組むことになる。自分自身の作品をつくってみる中で、彼らは音楽経験を持ち、様々な音楽の表現方法の理解をさらに発展させる。

#### 学習内容

##### 10.1.1 現在話題になっている音楽作品との関わり

- ・現在話題になっている様々な種類の様式の音楽を学び知り、それについてよく考えること、これまでの学年からの知識に關係付けること

- ・場合によっては、音楽の演奏を動き、絵画あるいは劇による表現に置き換えること
- ・実際に可能なら、現在話題になっている音楽の実例を演奏すること
- ・可能なら、現在話題になっている音楽で作品をつくってみる、生徒の楽器や声の素質を取り入れること

## 10.2 グループでの音楽

### 学習目標

それぞれの音楽的才能に応じて、生徒は様々な様式領域の音楽に取り組む音楽アンサンブルを構成する。彼らは共に歌ったり演奏したりすることによって、そこに生じた自由な空間を即興に利用するが、他方、そこに流れる時間に順応したり属したりするということを学ぶ。

### 学習内容

#### 10.2.1 アンサンブル音楽

- ・実際の可能性や生徒の前提に応じて、アンサンブルを構成すること
- ・生徒の興味に応じて、相応しい音楽作品を選び出すこと
- ・利用可能なアンサンブルのために曲を編曲すること、場合によっては、シーケンサーのプログラムや楽譜製作ソフトを取り入れること
- ・声や楽器を用いて基礎的な即興技能を試すこと
- ・音楽の進行を計画すること、即興の部分を取り入れること
- ・場合によっては、コンサートや録音媒体への録音を準備したり、構成したりすること

## 10.3 音楽劇

### 学習目標

実際の興味や可能性に応じて、生徒は様々な領域の音楽劇を学び知り、引き続いて、より大きな劇の作品をつくってみることを企てる。その際、彼らは言語や音楽、表現の才能をさらに発展させる。共に上演の準備をするとき、彼らは共同作業の重要性や有効性を知る。

### 学習内容

#### 10.3.1 音楽を用いた劇

- ・ミュージカル、オペラ、ロックオペラ
- ・様々なジャンルの適切な劇を学び知ること
- ・利用可能な手段で選び出された部分に作品を作り足すこと

#### 10.3.2 音楽を用いた劇の作品を作ってみる

- ・既成の適切な劇、または新たに構想した劇について共に決定すること
- ・実際の可能性に応じて役を割り当てること；歌手、役者、ダンサー、音楽家、舞台構成者、舞台技術者
- ・適切な音楽を選び出し、編曲すること、場合によっては、舞台音楽を自分自身で作ること
- ・作業分担によって練習し覚え込むこと、音楽と劇とを合わせる
- ・上演の準備をすること、場合によっては文書で記録すること

## 10.4 音楽作品

### 学習目標

より大きな音楽作品と取り組む中で、生徒は音楽に親しむ様々な方法を学び知る。つまり、彼らは音楽的才能をさらに伸ばし、文化の関連への興味を獲得することになる。

### 学習内容

#### 10.4.1 より大きな音楽作品

- ・生徒の興味に応じて作品を決定すること、場合によっては、その土地のコンサートの活気の可能性に応じて
- ・様々な観点から作品を解明すること、分析や解釈、音楽的に作り直すこと、動きや絵によって作り足すこと、場合によっては劇を作ること
- ・文化史的環境と取り組むこと、作品構成、音楽の表現内容、歴史的前提の関連を発見すること
- ・可能なら、コンサート訪問やその復習をすること

### 【参考文献・資料】

Albrecht Scheytt: "Musikland Bayern" 5-9, Metzler, 2001

佐野靖:「ドイツ連邦共和国」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』pp. 603-606

中島卓郎:「ドイツ連邦共和国」『音楽のカリキュラムの改善に関する研究—諸外国の動向—教科等の構成と開発に関する調査研究—研究成果報告書』国立教育政策研究所, 2003, pp. 41-55, 116

<http://www.isb.bayern.de/isb/index.asp>

<http://www.isb.bayern.de/isb/download.asp>



---

Title : Lehrplan fuer Hauptschule in Bayern, Germany

KAWANISHI, Yoshie (Graduate course of Pedagogy, Okayama University)

OKU, Shinobu (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract :

This is a Japanese version of <Musik> in “Lehrplan fuer Hauptschule” in Bayern, Germany. Regarding present states of music education in foreign countries several researches have been done under the impact of globalism. Japanese researchers have strong interests especially in German music education. However, we cannot get a bird-eye view of it because every state enacts its own Lehrplan.

In this situation, we tried to translate the Lehrplan in Bayern into Japanese to contribute researches in music education. The Lehrplan suggests following four points for Japanese music education:

- It has a viewpoint for students who may drop out from school.
- It is suggestive for comprehensive activities across subjects because the concepts of learning are based on not only students' music abilities but also on their general development. Important teaching points are clearly indicated with a relation to general development.
- It puts emphasis on actual activities and indicates various activities appropriately. Moreover, every activity is strongly related to learning of various music elements.
- Traditional music and popular music are included as actual and essential parts of contemporary music scenes and treated evenly with other genres.

Keywords : Bayern, Lehrplan, Hauptschule

---